

「神の救いを喜び苦難さえも喜ぶ信仰」

ローマ5：2-4

堀田修一 22・11・6

- I 5章の最初の2節から、主への信仰義認（主の祈りの「御国＝神の支配が私の心に来ますように」の始まり）のもたらす3つの恵みを教えられてきた。①神との平和な関係が与えられる恵み。②神の恵みに近づく権利、特権が与えられている恵み。③主の再臨により私たちが受ける神の栄光（私たちへの神の救いの完成として栄化＝罪のない栄光のからだにかえられる）望み（主の祈りの「御国が来ますように」の完成）を誇りとし喜ぶ恵み。主を信じ、御聖霊により新生し（新しい命をいただく）、神との和解、平和な関係が確立され、さらに神の恵みの中で成長していき（主の祈りの「御国＝神の支配が来ますように」の祈りが答えられ、世界宣教と教会形成による世界中での神の国、神の支配の拡大）、ついには、世の終わりの神の時の主の再臨により神の栄光を受けて救いの完成（罪のない主の姿、栄光のからだにかえられる、よみがえる）に至る。これは私たちの信仰の歩みの総括。神の驚くべき救いを喜びたい。
- II しかし、3節で、パウロはもう一つの事を付け加える。最初に「それだけではなく」と励ます。将来の主の再臨による救いの完成、栄光の望みを喜ぶだけではなく、現在の「苦難さえも喜んでいます」と励まされている。この「喜んでいます」の原語には、「誇る」という意味もある。これは単なる感情的な喜びを示すものではない。このみことばは、私たちが信仰者として苦難にどう対処するべきかを教えている。
1. 困難、苦難ほど私たちの信仰を試し、信仰の本当の姿を明らかにするものはない。問題への対処の仕方の中に、私たちの信仰が映し出される。私たちの信仰が苦難の中でこそ、生きて働くものか、飾り物にすぎなかったのか、本当の神を信頼して生きているのか、表面的な信仰か、明らかになる。私たちが、日々の苦難、試練の中でこそ、神がすべてを支配し、最善として下さるといふ神への信仰、信頼を持つことができますように。
 2. 苦難への良くない対処。自己憐憫（私だけ、どうしてこんな苦しみがあるのか？私はかわそうだという思い）、神と人への不平不満や絶望。不平を口にするのは、人間の通常の反応。神の最善に対する信頼を失い、神に不審を抱き、不平が出てくる。苦しみを避け、ただ流される人生となる。大切な人や物事と向き合うことを避ける。そこには真の解決の進展の光は見えない。
- III 聖書が語る苦難への真の対処法。
1. ローマ5：1-2にあるように、先ず神の「救いの恵み」を数え、感謝し、喜ぶことである。次に私たちの人生のすべて、日常生活の細かなことの中での神の配慮に目を向け、神が、これまで良くして下さったことを忘れず、自分の人生の中で、これまでの神の数々の恵みを数え感謝することである。「主をほめたたえよ。主が良くして下さったことを何一つ忘れるな（一つ

一つ感謝せよ)」詩篇103：2→主の祈りへの答え：御国（神の救い、神の支配が心にある恵み、神の教会に繋がっていることによる神の国の拡大、神の国の到来、救いの完成である主の再臨を待ち望める恵み）、今日までの日ごとの糧、必要の満たし、数え切れない罪の完全な赦し、悪、誘惑からの守り。

2. 5：3, 4のみことばの真の意味を深く知る。「苦難さえも喜んでいきます（原語：誇っています）」。私たちには、神が与えられた感情があるので、苦難があると、恐れ、逃げ出したくもなり、苦痛に圧倒されることは当然である。このみことばの真意は、キリスト者は、主がともにおられるので、苦難、試練、悲しみに押しつぶされて終わってしまうことはない、苦しみの中で、主にある喜びを見いだすことができるということ。苦難さえ喜んでいきますは、直訳すると「苦難の中でも喜んでいきます」。苦難、困難、生き詰まりの中でも、そこに主がおられ、神の深い最善の計画、意味、目的があるので神を見上げ喜ぶ。パウロは実際にそのように生きた。使徒16章にある。パウロとシラスはピリピの町で伝道したが、逮捕され、訴えられ、何度もむち打たれ、投獄された。主に従う故に受ける迫害、不当な苦しみだった。しかし「真夜中ごろ、パウロとシラスは祈りつつ、神を賛美する歌を歌っていた」：25。パウロの心は、次のみことばの心だったろう。「使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行った」使徒5：41。

3. 神を喜び、苦難を喜びの機会とする秘訣。「それは、苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです」：3, 4。「知っているからです」。ここに秘訣がある。パウロは苦難や苦しみに会うとき、その苦しみをすでに知っているある知識と結びつけた。先ず彼は、その時の気分や感情に任せず流されず、問題に正面から向き合う。自暴自棄になり、しかたがないとあきらめるのでもなく。苦難に直面するとき、病気になったとき、障害にぶち当たったとき、それをすでに知っている聖書、信仰の知識と結びつけて考える。ヤコブ1：5の「知恵、判断」→「心（原語：思考、考え方）を新たにすることで、自分を（主の姿に）変えていただきなさい」ローマ12：2。そこに真の信仰（盲目的信仰、洗脳、熱狂的な崇拜、カルトではなく、神が与えられた知性、考え方、判断が新しくされる信仰）が働いている。その生きた信仰により、それまで学んで知っている聖書の真理と直面している問題とを結び合わせて考え、結論を出す。その健全な信仰こそ、苦難の中で、神の前に静まり、その苦しみに神による意味、価値があるという深い理解に導かれ喜びが生まれる。パウロは、苦難をどんな知識、理解と結びつけたのか。まず、苦難に遭うと忍耐が生まれるということ。キリスト者が神のご真実に信頼し、正しく苦難に対処するなら、つまり神の真実な愛と最善のご計画を認めるなら、苦難を耐え忍び、価値ある忍耐（主に頼り困難に向き合う）を獲得することができる。

次にこの忍耐が「練られた品性を生み出す」：4。「練られた品性」の原語は、「テストを経て合格したもの」という意味。様々な苦しみ、困難を通過して、その試練に合格してできあがったもの。苦難で、心がひねくれ、ゆがんでしまうのではなく、むしろ燃える炉の中で金が精錬されていくように、忍耐は練られた品性、練達を生み出す。私たちから余分なものが取り除かれ、ますます練られ、きよめられていく（ヤコブ1：2-5）。「練られた品性は希望を生み出す」：4。この品性は、この地上でどんな困難に遭っても、その中で神に信頼し、その苦難も神の最善につなげて下さると希望を生み出す練られた品性。主が再臨されるまでの現在、試練の中でも失望せず神に祈る。「いつでも祈るべきで、失望してはいけない」ルカ18：1。「堅く立っ

て、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは、自分たちの労苦が主にあって無駄ではないことを知っているのですから（ここでも、知っている知識を労苦に結びつける）」Ⅰコリント15：58。私たちは、神にのみ望みを置くようになり、やがて来られる主の再臨による神の栄光の望み（救いの完成、罪のない栄光のからだ、悪のない素晴らしい新天新地）へと導かれていく。地上では、苦難の中で主がともにおられ支えられる望み、将来、主が再臨され、神の栄光にあずかる確かな望み。これこそパウロが用いた信仰の知識の、苦難から喜びを生み出す知識、聖書からの考え方。苦難に満ちたパウロの生涯を思い起こすとき、苦難は希望を生み出すということばは驚き。絶えず敵に狙われ、繰り返し投獄され、同労者にも裏切られ、その生涯は苦難の連続だった。その中で彼はなお「苦難さえも喜び誇る」と告白する。聖書は真実を語る。「キリスト・イエスにあって敬虔に生きよう（主に心から従う）と願う者はみな、迫害を受けます」Ⅱテモテ3：12。「世にあっては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい（希望を持ちなさい）。わたしはすでに世に勝ちました」ヨハネ16：33。主の足跡に従う限り、苦難があります。その苦難を神を信頼する信仰と切り離して解決しようとしてはなりません。私たちがすでに心に蓄えているみことばと結びつけてその苦難を考え捉える時、主は解決を与え、苦難、痛みを喜びに変えて下さる。苦難の中で神を信頼する信仰がいよいよ顕著になりますように。